

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2020 102



カール・ティーマン《逆光》1909 ダッハウギャラリー美術館連盟/ダッハウ絵画館蔵
「日・チェコ交流 100 周年 ミュシャと日本、日本とオルリック」展より

調査研究と展覧会

「日・チェコ交流 100 周年 ミュシャと日本、日本とオルリク」展をふりかえって

会期：2019 (令和元) 年 11 月 2 日 (土) —12 月 15 日 (日)

美術館や博物館の仕事の基本は、作品や資料を集めて収蔵し(収集)、それらを良い状態で保管して次世代へと引き継ぎ(保存)、より詳しく調べ(調査研究)、それらを多くの人に見てもらおう場を設け(展示公開)、人々の理解を広げる(教育普及)ことです。この原則に則るなら、美術館はコレクションだけを紹介していれば良いようにも思えます。しかし美術館は他館から作品を借りて展覧会を開きます。それは和歌山の、関西の、そして日本の人たちが触れられる美術の幅を広げる目的があるのはもちろんのこと、普段は見えていないコレクションの側面に、借用作品との繋がりから多面的に光を当てることで、コレクションの、広くは美術一般の研究を深めることにも繋がっています。

この秋、当館で開催した「ミュシャと日本、日本とオルリク」展では、国内の多数の美術館と個人の方からご出品いただいたほか、チェコとドイツの二つの美術館からも特別協力を得て、まとまった数の作品をお借りして展示しました。当館のコレクションは日本の近代美術が中心ですが、普段とは違う作品が加わることで、例えば冒頭で展示した浮世絵から、あるいはヨーロッパのジャポニズムとの関わりから、その意味や位置づけを立体的に見ることができる機会となりました。

しかし他館からどの作品を借りるのかを決めるためにも、やはり調査しなければなりません。各館が出している所蔵品目録や過去の展覧会が手掛かりにはなりますが、日頃からたくさんの美術館や展覧会に足を運んで、どこにどんな作品があるかを見ておくこと自体が学芸員にとっては大切な日々の調査にもなります。しかし所蔵館で一度も展示されたことがない作品を借りるためには、より踏み込んだ調査をすることが必要です。作品や資料の存在自体をどうやって知るか、情報をもらえるか、中に入れてもらえるかどうか、大きな関門になります。

今回の展覧会で作品を借用したダッハウ絵画館からは、ヴァルター・クレム(1883-1957)とカール・ティーマン(1881-1966)という二人の木版画家の作品を



ダッハウ絵画館外観

約 50 点お借りしましたが、実は私は、この美術館には 2011(平成 23) 年以来、この二人の一世代上にあたるアードルフ・ヘルツェル(1853-1934)という画家の調査で、何度か訪れていました。ダッハウは、ドイツ南部の中心都市ミュンヘンから車で 20 分ほどの距離にある小さな街で、第二次大戦中にはナチス・ドイツの強制収容所が置かれたことで、その名を知られています。そんな暗い歴史とは対照的に、19 世紀後半から 20 世紀にかけては数多くの芸術家たちがその豊かな自然に惹かれて移り住み、「芸術家コロニー／芸術家村」と呼ばれるコミュニティを形成していました。ヘルツェルはその前半期に活躍したひとりで、のちにバウハウスの教員となる芸術家たちを育てた人物でもあります。

一方クレムとティーマンは 1908 年にプラハからダッハウへと移り住み、共同でアトリエを構えた版画家たちでした。最初にこの美術館を訪れた時、小さいながらも版画の展示室があるのを見て、この街の美術にとって版画、特に木版画が重要な位置を占めていることを知りました。そしてそのとき出会ったクレムとティーマンの版画に、ヘルツェルらが油彩画で作り上げたダッハウ派と呼ばれる表現の特質が、木版の性格を介しながらも確かに受け継がれていることに気づきます。そして、ただただ面白いと思いつつながら、展示室でいくつか記録写真を撮って帰ってきたのでした。その時はまさか、8 年後に和歌山で展示するとは思っても

ずに――

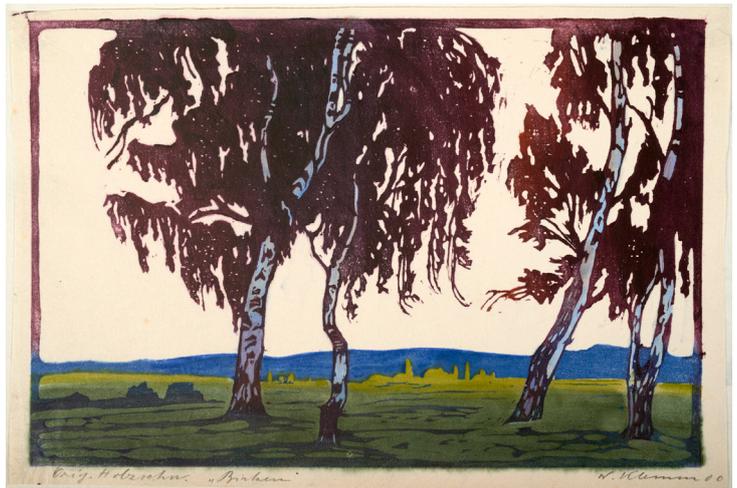
今回の展覧会は当初、「チェコにおけるジャポニズム」というプラハ国立美術館での先行研究(展覧会)を元にする予定でした。その中で、クレムとティーマンの名前も一作例として挙がっていましたが、チェコの中でもドイツ語コミュニティに生きた彼らは、「チェコの美術」の観点からは周辺に位置付けられていました。けれども、ダッハウで見ていた彼らの作品が、一般に知られるパリを中心としたジャポニズムとは異なる面白さを持っていることは明らかで、これを機会に少しでも調べられれば、きっと展覧会にも何らかのかたちで貢献できたらと期待し、すぐに助成金を申請しました。幸い資金を得て、今度は改めて彼らの版画の調査のためにダッハウへ向かいました。また同じくドイツ語コミュニティのチェコ人であるエミール・オルリク(1870-1932)の調査も合わせて組み込み、複数回の調査をすることができました。

ダッハウは、クレムとともに移り住んだティーマンが、1966 年に没するまで暮らしたところです。そのため遺品の多くはダッハウ市に寄贈され、ダッハウ絵画館が管理しています。以前から私の調査に対応してくださったエリザベス・ボーザー館長のご高配で、全ての所蔵作品カードとティーマン関係の資料を、収蔵庫の中で、直接自分で触りながらゆっくりと調べさせてもらいました。

その作業の中で見つけたのが、日本の型紙です。それは比較的大きなサイズで、



アドルフ・ヘルツェル《ダッハウの沼地風景》1898 ダッハウギャラリー美術館連盟
/ダッハウ絵画館蔵



ヴァルター・クレム《白樺》1906 ダッハウ市、ティーマンコレクション/ダッハウ絵画館蔵

細い糸で模様が繋がった繊細なものでした。世紀末からのジャポニスムブームで、型紙は染め上がった布地以上に人気を博し、海外へ数多く輸出されていました。実際にティーマンもこういった日本の工芸資料に加えて、『北斎漫画』をはじめとした多くの和本なども集めていたことがわかりました。

他にも、版画作品だけでなく版木もいくつか残されており、日本の板目木版らしい彫り方をした版木と、銅版画や木口木版で用いるビュランという緻密な彫刻ができる道具で彫った版木、また木ではなくゴムに似た素材のリノリウム版も残されており、ティーマンがさまざまな試みをしていたことが、直接の調査によってわかってきたのです。

そうするうちに展覧会の組み立てを、当初の「チェコのジャポニスム」だけを紹介するものから、ミュシャとオルリクという二人のチェコ人を軸に据えて、日本との間で還流するジャポニスムの波として捉え直すように変更することになり、オルリクと直接につながる次世代として

のクレムとティーマンは、展覧会の中で重要な意味を持つ版画家に位置付けられることになりました。急遽ダッハウに連絡し、作品の借用について相談したところ、全面的に協力する旨の返事を早々に得て、安堵したことを覚えています。そしてティーマンが所有していた型紙も、ジャポニスムとして受け入れられた三つの日本美術の要素「光琳、型紙、浮世絵」を紹介する序章の一角を成すものとして、あわせてお借りして展示できるようになりました。もしも目録に載っている作品だけを見ていれば、あるいは展覧会の出品作選定を目的とした直線的で無駄のない調査をしていれば、今回、こうした資料が残されていることにも気がつかないままだったでしょう。

ダッハウのほかにも、レーゲンスブルクの美術館ではティーマンの遺品のうち作品以外の資料類を調査し、コーブルクでは同時代の版画雑誌を熟覧するなど、たくさんの方の協力を得て20世紀初頭前後のドイツ語圏の版画の状況を、広く追いかけることができました。また直接繋が



ティーマンのコレクションに入っていた型紙のひとつ（部分）

りを得た研究者たちとの交流から、当館の活動や所蔵品を紹介することもできました。こうした広い調査の中で触れている情報が——8年前のように——気づかないうちに将来への種蒔きとなり、いつかまた展覧会として新しい芽を出せるように、常に動き回って調査を続けていく必要性を感じています。（青木加苗）

型紙の制作年代等については、文化庁文化財第一課 文化財調査官の生田ゆき様にご教示いただきました。またこのたびの調査は、DNP文化振興財団「グラフィック文化に関する学術研究助成」によるもので、現在も継続して助成いただいています。ここに記してお礼申し上げます。



カール・ティーマン《帆船》1910 ダッハウ市、ティーマンコレクション
/ダッハウ絵画館蔵



紙の種類や摺り方なども、直接調査して気がつくことがあります

芸術に親しもう！

おでかけ美術館 第1回 紀南地方 坂井淑恵展「水の中」

太地町立石垣記念館 2019(令和元)年10月3日(木)ー10月27日(日)



太地町立石垣記念館 前庭にあるのは紀の国トレイナート参加作家の石田真也さんの作品



近代美術館での「なつやすみの美術館」展で紹介した坂井淑恵さんの大作6点を展示しました

美術館では、いろいろな展覧会やワークショップ等を通して、美術に親しみ、さまざまなことを学べるよう取り組んでいます。

特に学校に通う年齢の皆さんにとって、美術に触れるきっかけとなるよう開催してきた「なつやすみの美術館」展は、回数を重ねて9回目となりました。教員の方々と作っているワークシート等を通して、中学校を中心に美術に親しむ機会として定着してきているように思います。

けれども、南北に長い和歌山県の北端に位置する和歌山市の近代美術館には、県内全域からは来館しにくいという声もありました。(遠いので来館しにくいという声は、実は和歌山市内からも少なくないのですが。)そこで、この「なつやすみの美術館」展の構成を変えて、紀南、紀中、紀北で開催しようと始めたのが、「おでかけ美術館」です。

今年の「なつやすみの美術館」では坂井

^{よしえ}淑恵さんの作品を入りに、水をテーマとした内容で構成しました。坂井さんの作品を抜き出し、太地町の石垣記念館で10月3日から27日まで開催したのが第一回目の「おでかけ美術館」、坂井淑恵展「水の中」です。

会場となった太地町立石垣記念館は、太地町で生まれ、移民として米国に渡って画家となった、石垣栄太郎の業績を顕彰する美術館です。石垣の夫人であり、評論家として活躍された石垣綾子さんが開設し、2002(平成14)年、太地町に寄贈されました。

今回の「おでかけ美術館」展では、普段は石垣栄太郎の作品を展示している場所で坂井さんの作品を紹介するとともに、レクチャールームに「なつやすみの美術館」展と同じく「ワークスペース」を設け、「水のかお」をテーマに制作にも取り組めるようにしました。

更に今回は、学校から来館するためのバス運行の経費も負担し、当館から学芸

員が赴いて鑑賞のサポートを行いました。

展覧会をはじめとする文化的な行事を体験できる機会が少ないことは、紀南地方に限らず多くの方が口にされることです。今回、実際に作品を見ることをどのように体験すれば良いのか、手がかりとなるワークシートも作り、来館された皆さんと、対話しながら鑑賞する方法で能動的に作品を読み解いていく活動を行いました。

坂井さんの作品は、人物や顔等の具体的な対象が描かれていながら、その描かれている状況がすぐには理解しがたいという性格のもので、ひと目で見て何となく雰囲気のようなものはわかるけれども、では一体何が描かれているのかは、各人でいろいろなことを考えながらそれぞれ見ていてもらいたいと作家自身も言うものですから、複数で話しながら見ていくにはうってつけです。

来館してくれた中学生たちはほとんどが、まずこれぐらいの大きさの作品を実



開会式には地元の中生も出席し、坂井さんに作品についてお話しいただきました



中学生との鑑賞の様子



ワークスペースも設置。多くの方が自分の作品作りに取り組みました



際に目にするのが初めてということに驚きます。展示されている6点に共通するところはどこだろうかという問いには、大きさやきれいな色遣い、人や水が描かれているといった答えが返ってきます。そこで、どの作品も坂井淑恵さんという一人の画家が描いたものであり、作家の個性的な作風というものがあることが意識されます。では、違うところはあるかと尋ねると、同じ水色でもどの作品も色が違うとか、展示されている《Full Flush》と《Green House》には一見すると人が居ないようだといいことに気が付きます。しかしよく見ていくと、目鼻のような形もあり、それは絵具にペインティングナイフで形をつけた、油絵具という画材だからこそ可能な描き方であることがわかります。個々の作品や、2点の比較によって、観点の焦点化を行い、更に一つの観点が別の観点へとつながる体験を言葉にすることで、一点一点の作品を見るという体験の深まりを味わってもらえたのではないかと思います。

また、石垣栄太郎の作品や生涯については、当館ではコレクション展等で頻繁に紹介していますが、地元周辺ではむしろ知る人が少なくなっているとも聞きます。「おでかけ美術館」展でお話してきた

皆さんには、石垣夫妻の生涯について、それがいかに大きな歴史の展開と関わるものであったか、知ってもらえる機会を持つことができました。

会期中には台風で休館を余儀なくされたり大雨に見舞われた日もありましたが、最終的には中学校8校から404名の来館がありました。また「紀の国トレイナート」*と開催期間が重なったこともあり、全体で690名の方に展示をご覧いただきました。

最終日には、坂井さんによるワークショップを開催し、小学生から高齢者までが参加。アクリル絵具、アラビアゴム糊、油絵具という異なる素材で描いた絵を水にさらすことで、思いがけない絵柄が現れる体験を楽しみました。

2021(令和3)年には和歌山県で全国高等学校総合文化祭や国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭の開催が予定されています。文化に対する興味、関心を高めるためには、体験することが最も重要ですが、体験するにもある程度は方法を学ぶ必要があります。

展示室で作品を見ることを通して学ぶという美術館の特性を超えて、体験の機会をどのように提供できるかは、インターネットが普及した今日の課題でもあります。ですが、「おでかけ美術館」ではまず、



ワークショップでは小学生から高齢者までが坂井さんに指導していただき制作に取り組みました

実際の作品を見るという体験ができる機会を広げていきたいと考えています。来年度は紀中、御坊市のぎやらりーながわで開催する予定ですので、広くご覧いただければと思います。(奥村泰彦)

* JR西日本の協力のもと、地域の有志とアーティストによって2014年に始まったアートプロジェクト。JRきのくに線の駅舎を中心に作品展示を行い、2019年は駅舎だけでなく地域での展示も展開し、石垣記念館の前庭も会場となった。



終了後、石垣栄太郎の作品を展示した様子。石垣栄太郎と綾子の生涯を紹介するコーナーも少し展示を変えさせていただきました

「外交史料と近代日本のあゆみ」展より

その2 和歌山県ゆかりの渡米画家、加地為也をめぐって

会期：2019(令和元)年11月2日(土)ー12月15日(日)

前稿に続き、「外交史料と近代日本のあゆみ」展で紹介したテーマから、本稿では明治時代に活躍した洋画家、加地為也についてとりあげます。

加地は残された作品や資料が少ないながら、アメリカで絵画を学んだ最初の日本人だと考えられます。1908(明治41)年に本多錦吉郎がまとめた、『追弔記念洋風美術家小伝』¹⁾が伝記的な基本資料です。同時代に洋画家として活躍した本多が、洋画の先人たちの事績をまとめた同書の中に、加地についての記述もあります。そこでは、和歌山藩士であること、1875(明治8)年に渡米し、サンフランシスコで絵画を学んだこと、さらにベルリンでも学び、帰国後、1894(明治27)年11月に死去したことなどが記されています。

1987(昭和62)年に当館でも開催した「太平洋を越えた日本の画家たち」展に際して調査が進められ、1885(明治18)年にイギリス経由でドイツに赴き、ベルリンの美術大学で学んだのち、1889(明治22)年4月に帰国、日本初の洋画家たちの団体、明治美術会に参加したことや、同会の教場で指導に当たったこと、第3回内国勧業博覧会(以下、内国博)の審査官を務めたことなど、本多の記述の確認と追加、修正が行われました²⁾。

外交史料館には、加地が1881(明治14)年に東京で開催される第2回内国博にサンフランシスコから作品を出品するため、同地日本領事館と外務省との間で交わされた文書³⁾が残されていました。本展ではその一部を加地の作品1点とともに展示しました。第2回内国博への出品は本多も記しており、その出品目録⁴⁾にも記録があります。外交史料館の史料からは、その出品に至る経緯をたどることができるとともに、自筆と考えられる履歴(以下、「履歴」)(図1)と出品物の目録(以下、「目録」)(図2)からは、新しい情報を得ることができます。

まずは加地の出自についてです。「目録」には、出品主として「米国桑港在留／元和歌山縣土族当時東京府管属／加地匡郷弟／加地為也」と記されています。和歌山藩士と伝えられてきた加地ですが、本人は元和歌山県土族、加地匡郷の弟だと名乗っています。しかし和歌山県立文書館の調査によれば、江戸時代の藩士名簿等をたどっても、幕末まで加地姓の藩士は確認できないとのことでした。ようやく1867(慶應3)年以降、明治初年までの藩士名簿等に伊予西条藩出身の加地姓の人物が確認できるようになるとのことでした⁵⁾。

加地の匡郷は、明治時代、紀州藩最後の藩主となった、徳川茂承に仕えたことが確認されます。茂承は西条藩の出身であるため、幕末に召し抱えられた同郷の加地姓の人物は匡郷である、と考えたくなりますが、今のところその間を結びつける資料は確認されていません。あくまで仮定の上での話ですが、もしそうであったとすれば、加地の出身も西条である可能性が考えられます。

そもそも加地について渡米前の事績はほぼ不明であり、日本の資料では生年も確かめられていませんでした。近年アメリカでの調査により、1851(嘉永4)年の生まれであることや、サンフランシスコでの展覧会出品歴が確認されています⁶⁾。生年は1880(明治13)年に行われた連邦国勢調査(1880 Federal Population Census)の記録に、同年6月1日の時点で29歳とあることから計算されます。同じ記録に職業は「portrait painter」、つまり肖像画家であると記されていました。

渡米前の活動としては、1873(明治6)年、『西洋教の杖』⁷⁾という3巻組の本の出版が確認されます。同書はニュートンやワシントンの幼年期の話など、欧米の様々な逸話を収録した児童向けの啓蒙書です。英語の原著を元に加地が翻訳、編

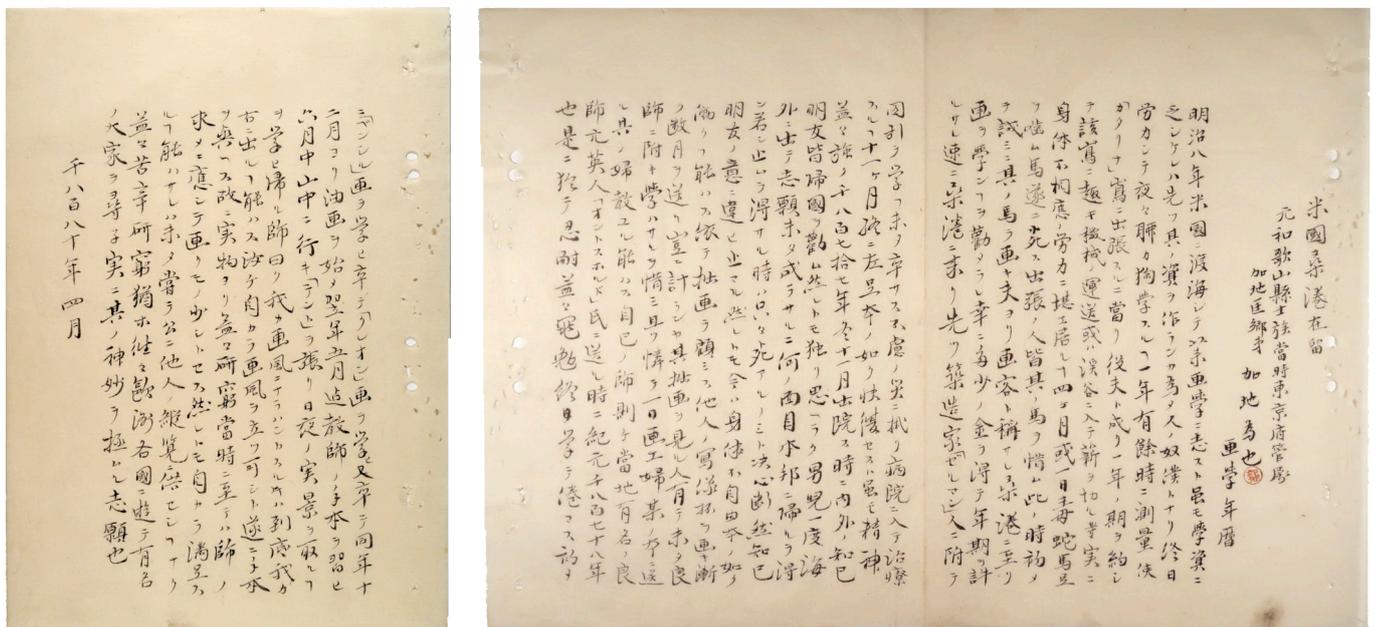


図1 「加地為也の画学年歴」『東京ニ於テ第二回勸業博覧会開設一件』1880 外務省外交史料館蔵

集していますので、加地はそれまでに英語を習得していたことが分かります。同書の冒頭には「源茂承」、つまり兄の仕える徳川茂承が題字を書いていることから、紀州徳川家とその教育、さらには渡米に関わっている可能性も考えられるでしょうか。加地が画家を志望した経緯は分かりませんが、欧米の文物が身近にある環境にいたことは想像されます。『西洋教の杖』には、児童を飽きさせないためとして、多数の挿絵が転載されていることも注目されます。

「履歴」によれば、渡米した加地は学資を稼ぐため、しばらくは「奴僕」として働きながら夜間に絵を独学します。サンタ・カタリナ島での測量調査に「役夫」として参加した後、ようやくサンフランシスコでドイツ人の建築家に製図を学び始めたものの、不慮の災難に遭い11ヶ月も入院。左足が不自由になったため、1877(明治10)年11月の退院に際しては帰国を勧められたようですが初志を貫き、翌年から「オンストホルド」(Juan Buckingham Wandesforde)という、サンフランシスコ美術家協会の創設メンバーでもあったイギリス人画家に就いて本格的に絵画を学んだことが記されます^{*8}。そして技術の習得が進み、作風の確立を目指し始めた

号	番	号	番	号	番	号	番
1	油類	2	油類	3	油類	4	油類
	魚類		魚類		魚類		魚類
	布		布		布		布
	紙		紙		紙		紙
	全		全		全		全
	加地為也		加地為也		加地為也		加地為也
	香		香		香		香
	百五拾円		百五拾円		百五拾円		百五拾円
							二百円

図2 「第2回内国勸業博覧会出品概目録、加地為也出品の内訳」『東京ニ於テ第二回勸業博覧会開設一件』1880 外務省外交史料館蔵



図3 加地為也《静物》1880 宮城県美術館蔵

頃に知ったのが、第2回内国博の開催でした。

内国博は、近代産業の振興を目的に明治政府が主催した一大イベントであり、美術もその一部門でした。作品発表の場としては当時最大であり、そこへの出品には、自らの学習成果を母国に伝えたいという強い気持ちを読み取ることもできるでしょう。希望は叶い、3点の作品がアメリカから送られ、会場に並びました。出品目録^{*4}には、「米国桑港在留 加地為也」による「米国カリホルニヤ景色」、「米国カリホルニヤ山鶴ノ図」、「米国カリホルニヤ魚類」が記録されています。「目録」に記した「景色」、「山中の鶴」、「魚類」の3点は、おそらくこれらに相当すると推測されます。

今回展示した《静物》(図3)の画面には魚が描かれており、出品作の「米国カリホルニヤ魚類」と内容は合います。画面右下にある「1880」と「S.F.」という書き込みは、この作品が1880(明治13)年にサンフランシスコで制作したものだと読み取れ、制作時期や場所も合致します。しかし、「目録」に記載された、「魚類」のサイズは額込みで、「縦2尺6寸、横3尺4寸」、つまり縦78cm、横102cm程度、現状の縦53.5cm、横73.5cmとは異なります。所蔵先によれば作品の額装は1980(昭和55)年度に収蔵^{*9}した当時のままであるとのことでした。収蔵前に変更されている可能性は考えられるものの、現時点では《静物》が、サンフランシスコから送られた第2回内国博の出品作だと確定することはできません。

その後、1886(明治19)年9月より、加地には国の建築局からドイツでの「芸術

修行」のために手当が支給されていたことが、国立公文書館の「公文類聚」^{*10}から判明します。ミュンヘンには既に原田直次郎が留学中でしたが、明治時代にドイツで学んだ画家として加地を位置づけることもできるでしょう。

「履歴」の翻刻も含め、本稿で十分に記載できなかった内容は、機会を改めてまとめたいと考えています。(宮本久宣)

*1 本多錦吉郎『追弔記念洋風美術家小伝』本多錦吉郎、1908年。青木茂編『明治洋画史料 懐想編』中央公論美術出版、1986年、pp.123-157に翻刻。
 *2 広島県立美術館編『太平洋を越えた日本の画家たち』展図録、同館ほか、1987年。
 *3 簿冊『東京ニ於テ第二回勸業博覧会開設一件』の中に、「桑港在留和歌山縣土族加地為也ヨリ第二回内国勸業博覧会へ自画出品ノ一件」として収められている。
 *4 東京国立文化財研究所編『内国勸業博覧会出品目録』中央公論美術出版社、1996年を参照。
 *5 加地郷閥関連の情報は、展覧会と一緒に担当した和歌山県立文書館の藤隆宏氏、平良聡弘氏の調査による。同館でも今回の展覧会に関する調査研究の成果は順次公開されていく予定。
 *6 *Asian American Art: A History, 1850-1970*, Stanford University Press, 2008: pp 345-346.
 *7 加地為也編『西洋教の杖』巻の一、二、三(尚古堂、1873年)については、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧が可能。同書は、さらに中村正直の序を加え、加地為也訳『西洋童蒙訓』(珊瑚閣、1876年)として再刊されている。
 *8 「履歴」の内容が『追弔記念洋風美術家小伝』の記述と合致するのは、本多が「明治十三年五月君が滞米中草する自叙伝を見る」と書いている通り、「履歴」に近い文章が手元にあったためだと考えられる。
 *9 元は河野保雄コレクション。『近代洋画にみる夢 河野保雄コレクションの全貌』展図録、福島県立美術館・府中市美術館、2013年、に収載。
 *10 「内務省稟議ニ依リ在独国加地為也へ手当金ヲ支給ス」1888年4月30日-5月11日。アジア歴史資料センターのウェブサイトにて閲覧可能。

「保存」の話をしよう。

⑫ たまっていくなものをためていくもの

携帯電話やデジタルカメラで撮影した画像がいっぱいになってお困りになっていないでしょうか。購読している新聞や雑誌、ダイレクトメールはたまらないように気をつけやすいのですが、データはいつのまにかたまっていきます。

データでなく、フィルムで写真をとっていたときも、整理するのがおっくうになるくらいたまりました。フィルムは薄くて場所をとらないので、油断していたからです。

いまは、当館でもたいていデジタルカメラで作品の写真を撮っていますが、少し前まではすべてフィルムを使っていました。フィルムが大きいほど記録される情報が多くなり、細かなところまで写せます。

精緻なイメージが欲しい大きな印刷物、ポスターなどには4×5(100×125mm)、図録の図版なら6×7(56×62mm)、記録用には35mmが必要、とおおよその目安があ

り、目的にあわせて撮影していました。家庭でスナップ写真を撮るときなどに、一般に使われていたフィルムは幅35mmです。

さらに、フィルムは色があせていきますので、使えなくなるたびに撮影します。そして最近ではデジタルデータの方がよく使われるので、また新しく撮影しています。するとどうなるかという、使わなくなったフィルムがたまっていくのです。

どのくらいのフィルムがあるか、1965(昭和40)年以来、当館の前身である和歌山県立美術館、そして当館のコレクションを代表する作品、川口軌外《少女と貝殻》1934年を例に数えてみました。

4×5カラーポジフィルム3点、6×7カラーポジフィルム14点、4×5カラーネガフィルム1点、6×7モノクロフィルム11点、ほかに、カラープリント7点とモノクロプリント5点があります。合計すると41点の画像

資料です。また、フィルムを貸し出すときには、デュープ(複製)を作ったために、さらに数が増えてもいます。いかに《少女と貝殻》が愛され、展覧会、あるいは画集や図録に登場した機会が多かったかわかります。

それにしても、さすがに大量です。写真を納めておくキャビネットはすでに満杯です。しかし、もう印刷に使えなくなったフィルムでも美術館ではこれを捨てません。なぜなら、大切な記録だからです。なにが記録されているかという、その写真を撮影したときの作品の状態です。

これらの写真があれば、作品の状態が変わったことに気づいたとき、いつごろから変化し始めていたのかということや、その経過を調べる重要な手がかりになります。その情報は、修復や環境の改善のために必要なのです。使わなくなったものではあっても、いらぬものではありません。(植野比佐見)



《少女と貝殻》は、コレクションの顔です



《少女と貝殻》のフィルム各種と紙焼き各種



フィルム用キャビネットは、いっぱいです

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分(入場は16時30分まで)
休館／毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

4.25(土)～6.28(日)

もようづくし

4.25(土)～6.21(日)

コレクション展 2020-春 特集 浜地清松

7.11(土)～8.30(日)

なつやすみの美術館 10 あまたの先日ひしめて今日

6.30(火)～9.6(日)

コレクション展 2020-夏 特集 浜口陽三

9.19(土)～11.23(月・祝)

開館50周年記念 特別展 もうひとつの日本美術史—近現代版画の名作 2020

9.19(土)～12.20(日)

開館50周年記念 和歌山県立近代美術館 コレクションの50年

12.1(火)～12.20(日)

開館50周年記念 美術館を展示する 県立近代美術館のサステナビリティ

2021.1.5(火)～2021.1.24(日)

コレクション名品選

2021.1.13(水)～2021.1.17(日)

第74回和歌山県美術展覧会(県展)

2021.1.20(水)～2021.1.24(日)

第6回和歌山県ジュニア美術展覧会(ジュニア県展)

2021年1月25日(月)～4月下旬(予定)まで、照明工事のため休館します。

9.10(木)～10月25(日)

おでかけ美術館 田中秀介 ぎやらりーながわ(御坊市)

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。



友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当: 中川

